

ISSN 0911-9027

鳴門教育大学

研 究 紀 要

(教育科学編)

第 11 卷

鳴門教育大学

1 9 9 6

執筆者紹介（掲載順）

小 野 由美子	鳴門教育大学言語系（国語）教育講座	八 木 成 和	鳴門教育大学幼児教育講座
横 山 知 幸	鳴門教育大学言語系（英語）教育講座	高 原 光 恵	鳴門教育大学障害児教育講座
丸 林 英 俊	鳴門教育大学自然系（数学）教育講座	井 上 久 祥	鳴門教育大学学校教育研究センター
三 原 茂 雄	徳島県立鳴門高等学校	佐 竹 勝 利	鳴門教育大学教育経営講座
金 児 正 史	東京都千代田区立麴町中学校	西 睦 夫	鳴門教育大学教育経営講座
福 岡 登	鳴門教育大学自然系（理科）教育講座	田 中 祐 次	鳴門教育大学教育経営講座
松 川 徳 雄	鳴門教育大学自然系（理科）教育講座	佐 古 秀 一	鳴門教育大学教育経営講座
跡 部 紘 三	鳴門教育大学自然系（理科）教育講座	荻 堂 盛 治	四天王寺国際仏教大学
本 田 亮	鳴門教育大学自然系（理科）教育講座	小野瀬 雅 人	鳴門教育大学教育方法講座
渡 邊 重 義	鳴門教育大学自然系（理科）教育講座	西之園 晴 夫	鳴門教育大学教育方法講座
長 島 真 人	鳴門教育大学芸術系（音楽）教育講座	石 田 美 清	鳴門教育大学生徒指導講座
田 甫 桂 三	鳴門教育大学人間形成基礎講座	森 谷 寛 之	鳴門教育大学生徒指導講座
松 田 伯 彦	鳴門教育大学人間形成基礎講座	辻 清 香	徳島県松茂町立松茂小学校
森 夏奈絵	鳴門教育大学大学院学校教育研究科	山 下 一 夫	鳴門教育大学生徒指導講座
島 宗 理	鳴門教育大学人間形成基礎講座	佐々木 保 行	鳴門教育大学幼児教育講座
山 崎 勝 之	鳴門教育大学人間形成基礎講座	橋 川 喜美代	鳴門教育大学幼児教育講座
田 中 淳 一	鳴門教育大学人間形成基礎講座	今 津 博 市	鳴門教育大学障害児教育講座
岩 永 定	鳴門教育大学教育経営講座	中 塚 善次郎	鳴門教育大学障害児教育講座
芝 山 明 義	鳴門教育大学教育経営講座	富 士 貴志夫	鳴門教育大学学校教育研究センター
益 子 典 文	鳴門教育大学教育方法講座	本 多 泰 洋	鳴門教育大学学校教育研究センター
青 木 真 理	鳴門教育大学生徒指導講座	中 本 孝 男	NTC 社長（京都市左京区）

鳴門教育大学研究紀要

（教育科学編）

第 11 卷

1996年3月19日 印刷

1996年3月19日 発行

編集兼発行者 鳴門教育大学

〒772 鳴門市鳴門町高島 Tel (0886) 87-1311

代 表 者 野 地 潤 家

研究紀要委員会代表 中 川 存

印 刷 所 協徳島印刷センター

〒770 徳島市問屋町165番地

Tel (0886) 25-0135

鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）

第 11 卷（1996）

目 次

1. 小学校に在籍する外国人子女の教育指導に関する研究
.....小野 由美子 (1)
2. 文法訳読法の補助装置
－媒介的補助中間言語としての「書き換え」能力－
.....横山 知幸 (13)
3. 中学校の関数に関わる実態調査(1)
.....丸林 英俊・三原 茂雄・金児 正史 (27)
4. 物理離れに関する教師の意識とその対策
.....福岡 登・松川 徳雄・跡部 紘三・本田 亮 (39)
5. シダ植物の教材史
.....渡邊 重義 (45)
6. 音楽授業における教材解釈の論理と教材提示の工夫に関する一考察(4)
－教科の思想に基づいた授業の分析と解釈の方法をめぐって－
.....長島 真人 (61)
7. 「いじめ」に関する小学校教師の意識とその変化
.....田甫 桂三 (93)
8. 性役割尺度の構成および信頼性と妥当性の検討
.....松田伯彦・森 夏奈絵・島宗 理・山崎勝之・田中淳一 (107)
9. 現職教員の教育観とその変容可能性に関する調査研究（第2報）
－鳴門教育大学大学院生と修了生の意識の比較を中心に－
.....岩永 定・田甫桂三・島宗 理・芝山明義・益子典文
青木真理・八木成和・高原光恵・井上久祥 (125)
10. 校内研修経営に関する事例的考察
－「校内研究」の問題点の分析－
.....佐竹 勝利・西 睦夫・田中 祐次・佐古 秀一
岩永 定・芝山 明義・荻堂 盛治 (135)
11. 幼児・児童における筆記具の持ち方と手先の巧緻性の関係
.....小野瀬 雅人 (151)

12. 現職教育における修士課程の教育制度と教育方法
ーもう一つの教師教育と遠隔教育ー
.....西之園 晴夫 (161)
13. 学校数学における非ルーチン問題の特性に関する一考察
ー情報処理アプローチに基づく初等代数の非ルーチン問題の特徴記述の試みー
.....益子 典文 (175)
14. 黒澤明『七人の侍』について
ートリックスター<菊千代>をめぐる一考察ー
.....青木 真理 (187)
15. 大正から昭和初期にかけての子どもの生活
ー家庭と学校におけるしつけと体罰ー
.....石田 美清 (201)
16. 九分割統合絵画法でみた教育実習前後での教師イメージの変化
.....森谷 寛之・辻 清香 (213)
17. 依存と自立の視点からみた不登校問題
.....山下 一夫 (227)
18. 「文化の日」の杜説は人格・知性の心理学的研究の対象となり得るか
ー朝日新聞社説(1948年～1994年)の分析と考察ー
.....佐々木 保行 (241)
19. アメリカにおけるフレーベル主義幼稚園の受容と子ども観・女性観の転回
.....橋川 喜美代 (253)
20. セルフ・システムの発達についての一考察
.....八木 成和 (265)
21. 障害児・者血清学Ⅱ ー特に補体に関する検討ー
.....今津 博市 (279)
22. 精神生理学的指標の変化に対する主観的判断 ー皮膚温の特異性ー
.....高原 光恵 (295)
23. 自己・他己双対理論に基づく人間精神発達理論
ーStern 理論の検討による細密化ー
.....中塚 善次郎 (309)
24. 生涯学習体系における学校教育と社会教育の連携論に関する研究(2)
ー学・社連携論の系譜、課題と展望ー
.....富士 貴志夫 (333)
25. インドネシア共和国の教育の現況
.....本多 泰洋・中本 孝男 (349)

小学校に在籍する外国人子女の教育指導に関する研究

小 野 由美子

(キーワード：外国人子女、日本語教育、学級運営、異文化理解)

1. まえがき

1990年の入国管理法改正以来、就労目的で入国する日系人の数が増大した。彼らの多くが家族とともに日本に滞在することから、日本の義務教育諸学校には多くの南米日系人子女が在籍することになった。日系人とはいえ、異なった文化と言語で育った子どもが、日本の小・中学校に多数在籍するというのは、日本の学校教育がかつて経験していない事態である。こうした予期せぬ「教育の国際化」は、画一性、等質性を特徴としてきたわが国の学校教育場面に多くの混乱をもたらしていることは容易に想像がつく。しかしその反面、南米の日系人子女の存在は、国際化社会に必須である、「異質性、多様性への寛容」な態度を育成する上で、またとない機会を提供していることも見逃せない。

外国人子女、とりわけ南米の日系人子女を取りまく教育の実態をできるだけ多面的に分析することを通して、国際化に対応する学校教育の可能性について探ってみたい。

2. 調査研究の方法

外国人子女に関する客観的データや文献検索による関連文献・資料の分析から、いわゆるニューカマーと呼ばれる外国人子女の分布には偏りがあるものの全国にまたがっていること、また必ずしも大都市に集中しているわけではないことが窺えた。一口に南米日系人子女の在籍す

る学校といっても、一方で全校生徒の1割近い生徒が日系人の子女で占められている学校があれば、その一方で1、2名の日系人子女が学んでいる学校もある。義務教育諸学校における外国人子女、とりわけ南米日系人子女の急増に対応するため、文部省は外国人子女教育研究協力校を指定したり、外国人子女が多数在籍する学校には国費による教員の加配を行うといった施策を実施に移した。しかし、全体としてみれば、加配の教員など望むべくもない、後者のような学校の方が多いのが現状である。そして、そのどちらも南米日系人子女教育の現実である。

このような状況を考慮して、今回の調査では南米日系人子女が多く在籍する外国人子女教育研究協力指定校と地方都市の小学校を事例として、関係者の面接、授業参観、2次資料の分析等によって、南米日系人子女の学校生活をできるだけ実態に即して記述することに重点を置いた(注1)。

3. A市の日系人子女受け入れの事例1：M子(ブラジル)の場合

(1) 小学校の担任教師(男性)の面接調査から
M子は1991年5月の連休明けから5年生のクラスに編入した。本校にはオープン・スペースを利用した交流があり、クラスや学年枠を取り払った活動があるので、全員ブラジルの子どまががいることは知っている。二人とも(3年生の弟あり)日本語はほとんどできなかった。

親と校長と話し合って、教育の目標を学校に

慣れることに主眼を置くこととした。ブラジルの学校のレベルが低いので、一斉授業で教科の授業についていくことはとても無理だった。親も学校や教育には関心を持っている。母親はブラジルでは高校の教師をしていた。親への連絡は漢字にふりがなをつけて、日本語指導教師を通じて連絡してもらった。

仲の良い友人（少し学力が低い）ができた。本人は明るく、前向きで、音楽、体育が得意だった。算数は九九が定着しておらず、かけ算、わり算の仕組みが理解できない。算数は積み重ねであり、1、2年生のレベルまでさかのぼって学習する必要がある。しかし、本人は学級では他人と同じことをしたいというプライドがある。

12月までにはひらがな、かたかなを習得し、日記が書けるようになった。社会、国語などは読めても（内容）理解ができない。何年日本に滞在するのか分からないので、どのような学力をつければいいのか、どの程度までできればいいのか分からない。本人の能力を絶対評価することとし、できるようになったこと、良いところを日本語とポルトガル語で記入した。

両親の帰りが遅く、子どもたちは家に帰らない。学校にできるだけ遅くいる。教師が家にいって、親が帰るまで一緒にいることもあった。二人で留守番をしているとき、訪問販売に引っかかりそうになったことがある。会社の人に相談して解決した。

中学校に入学して環境が一変した。小学校の同級生の1/3が同じ中学校に入学した。1クラスには顔見知りか2～3人しかいない。しかし、その子どもたちにしても、新しい環境に適應するのに精いっぱいである。クラブ、塾で忙しく、M子とかかわっている暇などない。M子はひとりぼっちになったという気持ち。それで一時期不登校になった。今は吹っ切れて再登校している。また、学力の同じくらいの別の友人を見つけ、（卒業後）小学校に2度訪ねてきた。子どもの側に甘えや依存心がある。回りもちやほやする。これが（M子にとって）よくなかったのだろうか。

（外国人子女が学級や学校にいることのメリットは）子ども同士遊びに行ったりして、習慣の違いが分かる。誕生パーティに招かれたりして、文化理解（ブラジル人にとっては誕生日はとても大切な日である）も深まる。友人をととても大切にすることも分かった。また、子どもたちは自分達の言いたいことをいかに伝えるか、どうやって分からせるか一生懸命努力する。違うところだけでなく、（国が違って）同じところもあるということもわかってくる。

(2) 中学校の担任教師（女性）の面接調査から

小学校からM子は積極的で良い子、日本に慣れているという報告があった。入学前に自宅に電話すると、母親と一緒に入学式に出席するという返事だった。

4月8日の入学式には母親と一緒に来たが、母親は途中から退席した。市内の三つの小学校からこの中学校に来ていることと、転校生もいたので、二日目にクラス全員に自己紹介をさせた。M子は原稿を書いてきて上手に話したが、ブラジルのことには一言も触れなかった。4月22、23日に集団訓練の宿泊キャンプがあることを伝えたとどうしても行かなければいけないかと聞いた。

4月15日の遠足を休んだ。体調を崩し、腹痛がするといって、病院で点滴を受けた。キャンプも欠席したが、この時は母親が仕事を休んで自宅と一緒にいた。M子はキャンプ後も登校しなかった。自宅へ電話すると、体調が悪いという返事だった。しかし、その後も連絡無しで休む日が続いた。

5月6日に家庭訪問し、母親と話をした。母親は、日本でお金を貯めておきたいといった。そのため両親は二人とも早朝から出勤し、夜も8時にならないと帰らない、水曜日と土曜日は少し早く、6時半ごろ帰る。父親は休日もアルバイトをしている。母親は日系人で大学を卒業後、高校で地理を教えていた。ブラジルへ帰ったら大学院へ行って、できれば大学で教えたいと思っているとのことだった。母親からはいろいろブラジルの事情を聞いた。

5月中旬、M子はまた学校に来なくなった。休んでから4～5日目、夜、母親に電話で連絡をとった。母親はM子が学校を休んでいることを知らなかった。「びっくりした、恥ずかしい。たいてい叱ったから明日からは大丈夫だ。」との返事で、母親はしきりに謝った。

次の日の朝、M子から電話があった。学校へ行く前に、先生に話したいことがあるので家に来て欲しいという。3～4日前、別のブラジル人の家に遊びに行ったら、10歳の子が学校にも行かず子どもの面倒を見ていた。この子を何とかしないと自分は学校には行けないと言う。小学校時代にM子に日本語を指導した教師と連絡を取り、一緒にM子の家に行った。その時のM子の話は次のような内容だった。

中学校はおもしろくない。ブラジル人だというだけで皆がのけ者にする。給食は口に合わない。残さずに食べるのが辛い。授業中の先生の言葉が分からない。勉強ができないことをみんなからバカにされるのではないか。話は聞いているけど分からない。自分では一生懸命やっているつもりなのに、誰も認めてくれない。しんどさを誰も分かってくれない。疲れた。

初めはみんな親切だけど、ことばができないと分かったら、別れて離れて行った。ブラジルにいるとき、中国の子がクラスに入ってきた。ことばの全然違う、遠いところからやってきた。クラスのみんなでポルトガル語を教えてあげた。でも、日本は先生が教えるだけ。小学校の時も、自分がブラジル人だと分かったら友だちが離れて行った。

彼女のこうした気持ちを両親が少しでも理解してやることができたら、と思って、日本語指導教師と二人で両親と話し合った。しかし、話はなかなかかみ合わなかった。両親は、学校に行かないで、ブラジル人の世話をしていたということに非常に腹をたてていた。「(M子は) うそが多い、わがまま、親の手伝いをしない」など、母親からは愚痴が聞かれた。親も日本で働いて疲れているんだと思った。

M子の話を聞いて、ブラジル人であるということと同級生や上級生に知られることを警戒し

ている、中学校は非常に厳しいところという先入見があって、宿題を忘れると大変なことになる、宿題が分からない、できないことへの不安が大きいということを知った。M子の場合、日常会話には不自由ないので、教師も同級生も授業中の説明も大丈夫と思いこんでいた。外国人と意識しないから、日本人の子どもと同じことを要求していた。

M子のこうした問題をクラス全員に話した。クラスの中にはM子に電話した子どももいた。ブラジル人であることを隠すことが一番の問題だと思って、一年生全体にブラジル人の友達が学校にいることを知らせ、ブラジルのことを勉強する時間を設けた。6月8日にブラジルからの留学生と日本語指導教師(配偶者がブラジル人)を招き、ブラジルのことを色々紹介してもらった。M子に電話して当日来るように話したが、「次の日から行く」ということだった。何とか、M子が安心して来れるクラスを作ること为目标にした。

6月9日は祝日だった。10日は結局、登校せず、M子は電話で「ごめんね、ごめんね」を繰り返した。11日は朝から登校した。夜、母親が電話で、「学校に行けたことがうれしい。ありがとう。」と話した。12日は途中から登校し、その次の週は来たり来なかったりだったが、6月17日以降、休まずに登校している。

クラスにはM子がいる、彼女はブラジル人なんだという意識はできた。彼女の存在を皆が意識するようになった。学級での朝の挨拶もポルトガル語でしている。M子に「どうして学校に来る気になったの。」と尋ねたら、「私が学校に行けば、パパもママも先生もうれしがらうなと思ったから」といった。

顔は日本人のような顔つきでも名札が一人カタカナなので、ブラジル人だということが分かる。それで名札を隠していた。現在、学級の中では安心して生活できるようになったと思うが、上級生に会ったらやはり名札を隠す。

授業が分かるようになりたいという気持ちを尊重して、放課後残って勉強するようにしている。誰か教師と一緒につけるときにはついて、

分数や漢字などを見ている。M子の場合、自分を殺してでもいい子でいようとするストレス、母親が教育熱心なことからくるプレッシャーがあるのではないだろうか。ブラジルとは味付けも違うのだし、給食は残しても何もいわないようにしている。

(初めて外国人子女を担当して) 接し方が分かったような気がする。もう一人担任すればゆとりを持って(対応できる)、表面だけをとらえるようなことはないと思う。日本で暮らしていくのと、ブラジルで暮らしていくのとは違うかも知れない。それぞれの国の習慣を尊重していかなければいけない。何もかも同化させようとするのは良くないのかも知れない。しかし、将来日本に住む場合は別だろう。違った文化に接するチャンスがあることはお互いにプラスだと思う。

(3) M子およびM子の両親との面接調査

M子は市内でも新しい、瀟洒なマンションに一家4人で住んでいた。母親が日系人である。来日前は、高校の教師をしていた。父親はスポーツジムを経営していたが、不景気から経営が悪化して失業し、家族で日本に働きに行くことにしたという。来日前の話では、日本での仕事は肉体労働ではなく、写真の焼き付けのような楽な仕事だと聞いていたが、来てみると話が全然違う。しかし、今更帰るわけにも行かないので我慢して働くことにした。しかし、最初住んでいたアパートはあまりにも狭く汚かったので、どうしても我慢できず、会社に話して、今のマンションに移ったという。

休日も建設関係のアルバイトをしている。大変だが、賃金がいい。お金を貯めて、ブラジルに家を建てた。ブラジルにいる祖父母が家の管理をしてくれている。12月に就労ビザが切れるのでブラジルに帰ろうと思っている。やっぱり、ブラジルがいい。会社の同僚は皆親切だ。父親はほとんど日本語ができない。

陽気な父親と比べて母親は教育熱心で、確かに厳しそうだった。母親のこととは反対に、M子は私たちにお茶を出してくれたり、色々気

を使ってくれ、よくお手伝いをするように見えた。母親は帰国後の子ども教育のことを盛んに気にしていた。弟のC男は算数がとてもよくできると、私たちに語った。日本で貯めたお金でブラジルに家をたてたといつて、うれしそうに写真を見せてくれた。母親の日本語は片言である。

M子に不登校のことを尋ねた。友だちができない、回りの子どもが冷たい、一生懸命にやっているのに誰もその大変さを認めてくれない、でも、今は友だちもできたので、学校に行くのがまた楽しくなった。明日もその友だちと一緒に勉強する。話の内容は担任教師から聞いていたこととほとんど同じであった。となりに母親がいるためか、M子は少し緊張気味に答えていた。C男は別室でテレビを見たりビデオゲームをしたりで、日本の子どもとまったく変わらない。

帰りは、みんなでマンションの入り口まで見送りにきてくれた。

(4) 日本語指導教師(女性)の面接調査から

日本で知り合ったブラジル人と結婚して、しばらくサンパウロに住んだ。その間子ども(男)が生まれたが、夫が日本の大学院で研究することになり家族で来日した。ポルトガル語は初級程度で、込み入った話は夫に助けてもらう。夫とは英語と日本語。市内の小中学校にも南米日系人の子どもが在籍するようになって、日本語のまったくできない子どもの指導に困って、誰かポルトガル語の分かる人というので白羽の矢がたった。

日本語指導の経験はまったくない。教職の免許もない。初めは手探り状態。嘱託のような形だから、市内の学校を2~3校を受け持って、1日2時間、午前中だけ、午後だけという形で巡回する。日本語の話せない子どものいる学校の校長が、必要だと思ったら教育委員会に日本語指導教師を派遣して欲しいと要望を出す。日本人の同級生が主要教科を勉強しているとき、日系人の子どもたちが日本語の勉強に来る。

日本語は学校の身の回りのものの名前から覚

える。まずはとにかくひらがな、かたかなが書ける、読めるようになるのが目標である。学習のスピードは子どもによってまったく違う。学習の習慣がなかったり、親が無関心であったり、情緒不安定な時は、日本語の学習はほとんど進まない。宿題をだしてもきちんとやってこなかったり。それを強く叱るわけにもいかない。

日本語を教えることが仕事といっても、実際には、カウンセラーやソーシャル・ワーカーのような仕事もしている。家庭連絡などは親との意思疎通が難しいからということで、担任から頼まれることが多い。担任の代わりに家庭訪問したり、連絡したりすることもある。日本語ができなくて欲求不満になっている子どもたちは、日本語の勉強だけでなく、自分の母語で話することができる、同じ国の子どもと話しができるということで、息のつける場所でもあるみたい。授業の準備をしていますが、子どもの話を聞いてやるほうが大事だと思ったら、授業は横において、子どもの話に耳を傾けてやることもあった。

M子は頑張り屋で良い子だった。ほとんど問題らしいことはなかった。小学校しか知らないが、担任の先生はあまりクラスの様子を知らせるということではなかったように思う。こちらでも、何か気がついた時だけ連絡した。不登校と聞いてびっくりした。中学校から頼まれて、ブラジルの習慣や挨拶を教えに行った。

別な中学校で、夏休みに日系人の子どもが家出をしたことがあった。親が心配して自分のところに電話をしてきた。夜中になって本人から別の町にいと電話で知らせてきた。早速、学校の関係者に電話で連絡したら、迎えに行っていきたいという。何か困ったことが起きると頼りにされる。でも、自分は囑託であって、正規の職員ではない。「私は学校の職員として行動するのか。」と電話で尋ねたら、そうだという返事だった。ブラジル人の夫は、どうしてこのようなことで私がわざわざ夜中に学校の代わりに彼を迎えに行かなければならないのか理解できず、非常に立腹していた。

日本語指導教師と学校のかかわりは、学校や

担任によって違う。職員の一人として扱ってくれ、学校行事に参加するよう声をかけてくれるところがあれば、行って帰るだけのような学校もある。市から派遣される期間（一日2時間、原則3ヶ月）では、とうてい、学習についていくことのできる日本語を教えるのは無理だと思う。

2. A市の日系人子女受け入れの事例2： N子、M男（ペルー）の場合

（担任教師の面接調査から）

兄妹の母親は2年半前にペルーから日本へ単身で働きに来了。日本語は片言程度しか話せない。1992年2月ごろ、ペルーから子ども二人を呼び寄せた。その時は日本語が堪能な祖母（2世）が付き添って来ていた。二人とも日本語がまったくできず、祖母が通訳代わりであった。4月の学年初めまでは学校に慣れることを目的に、祖母と一緒に学校に通った。ことばのハンディがあるので、学年を1年ずつ下げてN子は4年生、M男は5年生に編入することにした。

母親が学校に対して関心が高く、必ず学校へ行かせる。懇談会には欠かさず参加するが、どのくらい意思疎通ができていのかは疑問である。通知表にはローマ字で子どものできるようになったところを書く。

N子は負けず嫌いで向学心が旺盛。何とか日本で生活していくための基礎学力をつけてやりたい。日本語指導教師と一緒に、毎日2時間日本語を学んだ。そのほかの面では、学校に慣れ、日本の習慣に慣れることを当面の目標にした。日本語が読めるようになっていても意味が分からない。文章題が解けない。漢字には振りがなをつけ、できるものだけすればよいということにした。

クラスには他にも学力遅進児がいるので、N子だけに時間を費やすわけにもいかないのが悩みである。また、子どもとしては遊びたいのに、毎日学校に残して教えるというのも問題。日本語の習得が不十分なまま、日本語指導教師の派遣が打ち切りになった。市の連絡協議会の同和

教育部会でも日系ブラジル人の学力保障が取り組みの課題の一つになっている。

母親は雇用が不安定で、いつ首切りにあうかを一番心配していた。景気の良いときには夜の10時ごろまで残業していたが、景気が悪くなって早く（7時～8時）帰宅するようになった。会社の送迎バスで通勤しているが、会社の待遇はよいという話で、社長を信頼している様子である。

新学期の学年編成では仲の良い子を同じクラスにするよう配慮した。子どもにとってはN子が珍しい。母親の帰宅が遅く、学校から帰ってもひとりぼっちなので、友だちが遊びにいたりしている。いつか、雨が降ったらそれを珍しそうに眺めているので、それからクラスでブラジルの気候の話になった。N子のちょっとした行動に注目して、授業の話題にしている。

M男は病気の経験があるが、それを低学力のせいにはしないようにしている。M男は会話が理解できず聞き返すことも多く、また、自分の言いたいことが伝わらない。しかし、体を動かすことが好きで、図工、体育、特にバスケットが好き。スポーツ少年団に入っている。彼にとっては日本語での自己表現が難しく、困ったら黙ってしまう。ストレスを発散できず、初めのころはことばが分からないと喧嘩をしていた。日本語、算数、理科は日本で生活する上では必要なので、何とか分かるようにしてやりたい。

学校としては、日本へ行くことを決めた親の勇気と実行力を評価する姿勢を子どもたちの前で示している。そうした親について日本へやって来たN子とM男の勇気を担任が積極的にたたえるようにしている。ものごとを悲観的に考えるのではなく、担任教師がプラスの方向に変えていくことが大事である。市の国際交流計画で学校に外国人を招いて交流することになった時はペルー人を希望した。N子もM男もとてもうれしそうだった。

行政に望むことは、日本語習得期間の延長である。単に日本語が読めるだけでなく、読解の能力は学力と直結しているので、どうやってその能力をつけるのかが大きな課題である。個別

の学力を保障してやりたい。日本で生活する最低の力をつけることを目標にしている。放課後、日本語学習を援助するようなボランティアがいれば助かる。

3. A市の日系人子女受け入れの事例3：

L子（ブラジル）の場合

（担任教師（女性）の面接調査から）

L子は4年前の5月、来日してすぐこの学校へやってきた。年齢は4年生相当であったが、日本語を確実に習得させたいという父親のたつての希望で1年生に編入した。L子は1年生の机を見て嫌がったが、父親が厳しい調子で説得した。ピアス、プレスレット、マニキュアをしていた。学校周辺のアパートはトイレが汲み取り式でその臭いにどうしても慣れることができないので、校区外にある会社のアパートから父親と一緒に通学している。1年生は下校が早いので、会社のプレイルームで一人で遊んでいたが、見かねた近所の電気屋のおばあさんが親代りに面倒を見ていた。L子も親のように慕っていた。

1年生の10月ごろ、休みが続いた。台風のせいかなと不思議に思って連絡を取ると、父親が東北の方に職探しに行っていた。来日前にブラジルで聞いていた雇用条件と違っていたので、もっと条件の良いところへ代わりたいたいということだった。母親とL子で父親を説得し、他県への引っ越しは止めさせた。結局、父親は会社を代わったが、L子は引き続き同じ小学校に通学することになった。年齢が近いので、6年生が廊下でL子を待っていたりする。校庭で待つのはいいが廊下で待つのは止めて欲しい、物珍しそうに覗いたり、指さしをするのも止めて、そっと見守って欲しいというのが担任の希望だった。国際交流とか理解とかではなく、まずは学級に慣れさせ、学級で落ち着かせることが先決だった。年長児であることのジレンマも大きく、彼女をあるがまま受け入れて（変わることを）待つことにした。クラスの子どもや保護者にも不平や不満がないことはなかった。子どもたち

には帰りの会で、折りにふれL子のことを話した。強制しないで、徐々にと思った。

彼女の世話係のような女の子が二人いて、一緒に遊んだり泊まりに行ったりした。2学期の終わり頃、L子は基準服を来てくるようになった。ピアスとブレスレットは相変わらずだった。また、ブラジルの子どもが転入してきてからは生き生きとしてきた。

日本語はひらがなから。本読みをさせて、毎日、校長先生のところへ行行って聞いてもらい、ほめてもらった。通知表にはL子ができること、いいことをひらがなで書いた。L子の場合は同級生よりも実際は年長だから、学力、体力でもいつも勝っていて、傷つくことがなかった。

L子を担任して、待つことを学んだ。お互いが分かり合うまで「待つ」ことの大切さを互いに学んだと思う。同じようにすることが同じではない。L子は頑張り屋で楽天的な性格だった。物事を悪い方に考えない。たとえば、雨が降った時に、「先生、雨が降ったらいいことがあるよ。私が日本に着いたときも雨が降ってたんだよ。」と私に話した。

市の教育研究連絡協議会があるが実際には(外国人子女の問題は)学校単位の取り組みである。L子の問題を一人でしょい込むのではなく、学年会ではこれができるようになった、こういう問題がでてきたなど、常に連絡を取り合ったり、職員会議でも報告したり、(話し合う)雰囲気があった。父親の会社の通訳の人、親身になって面倒を見てくれた電気屋のおばあさんの存在、協力も彼女の適応には見逃せない。日本語が話せるようになったとき、彼女の学年を年齢相当の学年に戻せないかと思ったがダメだった。飛び級をもう少し弾力的に運用できないものだろうか。子どもたちには出会ったことがない人と出会いたい、色々経験したい、知りたいという好奇心はあるが、取り立てて国際交流などは言っていない。

4 文部省外国人教育研究協力指定校での受け入れの事例：

豊田市立東保見小学校の場合

東保見小学校は、自動車産業の盛んな愛知県豊田市の北部に位置する保見団地の一角にある。校区である保見団地には1,000名を越える外国人が住んでいる。1993年9月現在、全校生徒477人中、38人が外国人子女であり、その内訳は、ブラジル籍34名、ペルー籍3名、中国籍1名となっている。

同校の資料によると、外国人子女の適応指導と人間尊重を基調とした国際理解教育を研究目標として、職員組織を適応指導部、国際交流活動部、普通学級指導部とに分けている。

適応指導部では外国人子女の編入にかかわる手続きの確立を図ること、外国人子女家庭との連携、国際学級での日本語指導などを考え、実践していくとされている。ここでは、ポルトガル語による学校案内、教師の誰もが利用できるように整理されたポルトガル語による連絡文書が用意されている。日本語を担当する2名の加配の教師のほか、日本語ーポルトガル語の通訳(日系人女性)や保護者の勤務する会社の通訳などの協力で、保護者会、個別懇談会で学校の方針、学校での子どもの様子をきめ細かく伝えることができる。教師、保護者が緊密に連携して子どもの教育に専念できる条件づくりが進んでいることがわかる。

通知表は、1992年度には、日常会話・国語、算数、その他の学習、生活の様子、特別活動の様子の5つの観点で評価した。評価の方法は、できるようになったことを中心に、平仮名で表現して渡し、詳しいことは通訳を介して個別懇談会で知らせる。1993年度は日本人の子どもと同じように全教科で評価を行っているということである。

日本語指導をする国際学級は2クラス設置されており、専任教師2名のほか日本人ボランティア2名(ブラジル滞在経験者)、通訳1名が関わっている。一昨年の学年別編成から、学習進

度、性格、年齢を考慮した習熟度編成に変えている。また、漢字学習を支援するための教育用コンピューターソフトも使用している。このような取り出し授業による日本語指導の他、国際学級の専任教師が普通学級に出向き、外国人子女を補助しながら教科の学習（算数）をする、ティーム・ティーチング方式も導入している。

また、東保見小学校では、母語の保持を目的にどの子どもも週に1時間ポルトガル語の授業を受けるようにしている。ポルトガル語を自由に使えることは子どもたちの心の安定につながり、母国を大切に作る気持ちの芽生えが期待できるという。国際交流活動部は交流のもととなるあいさつを子どもたちの間に徹底させ、国際理解のための機会（ともだち集会の企画実施）と環境づくり（ワールドふれあいルーム、各学級における国際コーナーづくり）を担当する。保護者が学校を訪れる機会が多いことから、特別教室は日本語とともにポルトガル語による表示が添えられている。

普通学級指導部では外国人子女が生きる学習指導と、国際理解を進めるために、外国への関心を高める国際タイムを設定し、内容、方法を検討しながら実践している。

このように東保見小学校ではブラジル人の子どもがほとんどの学級にもいて、日常的に異文化に接する機会がある。しかし、接する機会があること＝機会を利用して異文化の理解を深めることではないことは、A市の事例で明白である。子どもたちが異文化を享受する機会を得るためには、教師の準備と働きかけが必要である。たとえば、低学年の生活科の授業では、「団地の店を探検しよう」というテーマで子どもは団地の酒店を探検した。そこで外国の品物がたくさん並べられていることに気がつき、その理由を質問したところ、1日に100人以上のブラジル人が利用するという答に、子どもは驚いた。次に、自分たちで買い物をしようという活動に発展し、買い物の実践を通して、買い物の工夫だけでなく、品物の並べ方、日付と値段の関係など、店の工夫にも気づくことができた。その時の体験をブラジル人の子どもは次のように日

記に書いている。

「日本のおみせのひみつがいっぱいわかったよ。日本のおみせについてブラジルのいとこたちにおしえてあげたいです。かいものもすこしずつじぶんでやっていけるようになりたいです。」（東保見小学校、1993、P14）

単元の終わりの活動として、一人一人の気持ちを全体に発表する会を持った。その時、ブラジル人のM子はブラジルでの野菜の買い方が日本と違うことを説明した。それを聞いた子どもたちは興味を持ち、M子に次々と質問を投げかけた。M子の発表を聞いたS子の感想（日記）である。

「今日、M子さんの発表をきき、日本とブラジルではしなもののうりかたやお店のようすがちがうことがわかりました。やっぱり国がちがうといろいろなことがちがうんだなあ。でも、お店はだいじなんだということもわかりました。いつか大人になったらブラジルに行って、ブラジルの店で好きなだけ買い物をしたいと思いました。」（東保見小学校、1993、P14）

IV ま と め

「子供こそ異文化理解の原点」（渡辺、1993、P62）といわれるが、事例研究を通して思うことは、催し物の時に出会う、その場限りの外国人や異文化への関心と、日常的に毎日接している外国人子女への関心は別物ではないだろうか、ということである。小学校では、子どもたちは、好奇心から初めは外国人子女をちやほやしていても、国際理解、異文化理解を授業の中に構造化していかない限り、日常的に自らがかわらなければならなくなるかと敬遠するという状況が存在する。中学校になると、学校の雰囲気は一変して受験に照準を合わせたものとなる。教科内容の理解に必要な日本語を習得していない日系人子女は、落ちこぼれとは言わないまでも「クラスのお客さん」である。授業が理解できない、自分達に関心を示す同級生もいない、文化の違いからくる「いじめ」（手をポケットに入れたまま歩いたり、話をする、上級生に挨拶をしない、

など)、学校での居場所のなさなどから、不登校も生じている。

外国人子女を担当する教師は、皆一生懸命である。何年日本に住むかも分からず、教育の見通しがたちにくい。また、教師の力ではどうしようもない家庭の問題もある。しかし、外国人子女の問題を学年、あるいは学校全体の問題として取り組む姿勢のないところでは、負担感だけが残る。「管理職が動かないと自分達は何もできない。(外国人子女の存在は)日本人の子どもたちには特別な効果はもたらしていない。教師の精神的負担感は非常に大きい。」(中学校教師、男性)

その一方で、やり方次第では次のような成果も生まれていることも事実である。

「ぼくは、先日いとこの家に遊びにいきました。いとこの学校に外国の子が来て、いろいろなことがあったと、いとこが喜んで話をしてくれました。しかし、ぼくは今まであまりかんがえたことはなかったけど、東保見小学校には毎日外国の子がいるんだなと気づいたような気持ちでした。

ぼくの友だちも、ブラジルの子がいます。でも、外国の子なんだということあまり考えたことありません。日本の友だちとまったく同じです。いとこが、外国の子のことを盛んに言っていたが、何だか変に感じました。」(東保見小学校、P19)

このような感想を持つ子どもたちができるだけ多く育つように、さしあたって次のような対策が望まれる。

1) できるだけ外国人子女を一つの学校に集める。

教員の加配が可能になったり、子ども同士が母語で話せるという安心感を生む。

2) 日本語指導教師の事前研修を実施する。

面接した日本語指導教師(4名)のうち、日本語指導の研修を受けていたのは1名のみ。教職経験のある者か、教員免許を有している者が望ましい。

3) 外国人子女を受け入れる学校を対象とした外国語、異文化の研修を実施する。

4) 外国人子女を担当する教師のネットワークを作る。

市町村、都道府県、他府県というさまざまなレベルでのネットワークを作り、カリキュラム、指導法、親とのコミュニケーションなどについて情報交換をし、互いに学び合うことができる。また、貴重な実践知を共有の財産とし、蓄積することができる。こうしたことこそ、義務教育諸学校における日本語指導を体系化し、より効果的な教材を作成することへの第一歩となるはずである。

5) 外国人子女、保護者が一同に会せる場を提供する。

6) 外国人子女の転入手続き、連絡を容易にするため、ポルトガル語、スペイン語などの外国語によるパンフレットを用意し学校に配布する。

神戸市、豊田市ほか、多くの自治体がすでに学校からの連絡を数カ国語に翻訳したものを持っているので、こうした資料を利用することを考える。

* 本研究は財団法人マツダ財団助成金(平成4年度)の交付を受けた。

* 本論文は中国四国教育学会第46回大会(1994年11月12日、広島文教女子大学)で発表したものを一部加筆修正した。

(注1)資料収集、面接調査の実施時期は下記の通りである。また、本文中、面接での教師の発言は、できるだけ忠実であることを心がけながら、narrativeの形に再構成した。

- (1) 文献検索等による関連文献、資料の収集と分析 1993.3
- (2) 外国人子女を担当する教師の面接調査 1993.9
- (3) 外国人子女とその保護者の面接調査 1993.9
- (4) 日本語指導教師に対する面接調査 1993.9~10
- (5) 地域における日本語教室の参観 1993.9
- (6) 外国人子女教育研究指定校の研究授業観察、

保護者面接および二次資料の分析1993.11

参考文献

愛知県豊田市立東保見小学校（1993） 広い国際視野を育て、いきいきと生活できる子供の育成

駒井洋（1993） 外国人労働者定住への道 明石書店

中国新聞社（1992） 移民

横田雅弘、堀江学編（1994） 異文化接触と日本人 現代のエスプリ322

渡辺文夫編（1992） 国際化と異文化教育 現代のエスプリ299

渡辺文夫編（1993） 異文化間コンフリクト・マネジメント 現代のエスプリ 308
月刊日本語 1993年1月号 アルク

日本語教育学会編（1994） 日本語教育 83号
（特集 年少者のための日本語教育）

（受理日1995年9月28日）

Education of Japanese Latinos in Japanese Elementary Schools

Yumiko ONO

After the revision of the Immigration Law, the number of persons of Japanese descent who have entered the country seeking employment has swelled. Due to the fact that many of them reside in Japan with their families, many South American children of Japanese descent are enrolling in Japan's compulsory education level schools. Even though they are of Japanese descent, this large scale enrollment of children who were brought up with different cultures and languages in Japan's elementary and junior high schools is a situation that schooling in Japan has never experienced. It is easy to surmise that this unforeseen "internationalization of education" has brought about much confusion in the educational scene of our country which had come to be distinguished as uniform and homogenous. However, on the other hand, the fact that the existence of these South American children of Japanese descent is not only inevitable in an international society, but also it should not be overlooked that it may provide a unique opportunity for us Japanese to foster an attitude towards heterogeneity and diversity.

In this paper, the author explored the capacity of schooling to cope with internationalization by going through an analysis of the aspect of education being besieged by foreign children, particularly those of Japanese descent, from as many sides as possible.

文法訳読法の補助装置

—媒介的補助中間言語としての「書き換え」能力—

横山 知幸

(キーワード：文法訳読法，中間言語，書き換え)

造に組み込むことを試みる。

0 はじめに

文法訳読式教授法，あるいは単に文法訳読法と言われる教授法は，非常に広範にまた長期にわたって利用されて来たにもかかわらず，自らの正当性を主張するための理論的基盤を持たぬ教授法である。その存在が強大であったがゆえに，多くの場合攻撃の対象となるのみであった。その存在自体は今後も不滅のものであろうが，中等教育では，さすがのその力にも僅かながらゆらぎが見える。今こそ，この教授法を支持する者も攻撃する者も，論拠の乏しい価値判断をしばらく保留して，この教授法の構造を正しく把握し，短所のみならず長所をも客観的に説明出来る理論的基盤をつくる好機ではないかと思う。そのような基盤があつてこそ，この教授法を必要以上に憎悪して排除しようとしたたり，他の，特にコミュニケーションという言葉と関係の深い教授法・教授技術群への過度の期待とその期待の裏返しである幻滅を感じることなく，極めて現実的で合理的な外国語学習を推進して行くことが出来るようになると思われる。

すでにそのための基礎作業の一部は「文法訳読法の基本構造 —媒介的補助中間言語としての直訳体—」という論文¹⁾の中で行った。この論文で示した基本構造を一部修正・精密化する形で，本論文では英文和訳を中心とした文法訳読法により詳細な構造を提案する。その際に，いわゆる「書き換え」能力を，英文和訳の基本構造の働きを支援する補助装置としてとらえ，その構

1 基本的用語

ここでは，本論文で用いる基本的な用語を説明する。その他の重要な用語はその用語が導入される節で説明される。またここで説明される用語の一部は第二節以下でより詳しく説明される。

この論文で以下「文」と言う場合には「具体的な個々のテキスト [=a piece of spoken or written language²⁾]」を指している。「言語」と言う場合には「文を産出する体系」を指している。一般に「何々言語 (何々語)」，具体的には「英語」，「日本語」，「第一言語」，「第二言語」等と言う場合には，主として，そのような産出体系としての側面が論じられている。「中間言語」と言う場合には「文を産出する体系であり，第一言語以外に学習者が自己の中に形成しつつある言語」を指している。「何々言語文 (何々語文)」と言う場合には「産出体系としてのその言語によって産出された文」あるいは「産出体系としてのその言語によって産出され得る文」を指している。「目標言語」と言う場合には「中間言語の産出する文が，ある言語の産出する文に近似して行く場合，その近似の対象となる文を産出する言語」を指している。なお，文を産出する体系としての言語は，文を産出するために必要な入力となる他の文を解釈する下位体系を持つ。また，この論文ではいわゆる「第二言語」と「外国語」との区別を行わず，両者を含めて単に「第